

武漢大学留学記
福島県立医科大学
医学部 5年 湯田健太郎

2016年2月22日から3月30日までの38日間、福島県立医科大学の国際交流事業の一つとして中国武漢大学医学部に留学させていただきました。このレポートはその38日間でどのように学び、生活し、何を感じ、経験したかをまとめたものです。また、これから武漢への留学を考えていて、参考としてこの報告書を読む後輩もいることと思います。そんなみなさんに、この留学の内容、魅力を知ってもらい、少しでも「僕、私も行ってみたいかも!」とarryっていたいただければ幸いです。

<武漢大学について>

武漢大学は、中国のほぼ中心にあり1,000万の人口を誇る大都市、武漢市最大の総合大学です。学生数は50,000人以上で、キャンパスの敷地も広大です。また、武漢大学の桜はとて有名で、満開の時期には中国全土から観光客が詰めかけます。医学部キャンパスは、そのようなメインキャンパスから歩いて20分ほど離れた場所にあります。

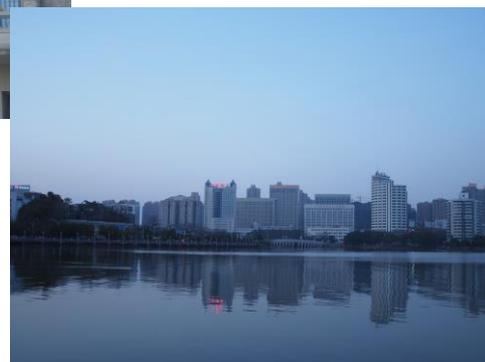
武漢大学医学部には、1学年300人ほどの学生がいて、医学部キャンパスの中だけでもたくさんの学生でにぎわっています。また、留学生のためのクラス(全て英語で授業を行う)もあり、各国からの留学生も多いです。



たくさんの桜の見物客でにぎわうメインキャンパス



メインキャンパスにて



武漢大学部医学部キャンパス(真ん中のビル群)

<学習について>

○解剖学講座

僕はこの留学期間中、解剖学講座に所属していました。この講座は、戴(Dai)教授をはじめ福島医大に留学した経験のある先生が4名おり、本当に暖かく迎えてくださいました。特に戴教授は日本語が本当にお上手で、ほとんど日本語で会話していました。今回僕は特に研究は行わず、はじめに配られた解剖の授業の予定表の中から好きな授業に自由に参加して良いというものでした。僕は留学生向けの1年生の系統解剖学と、2年生の解剖学実習(ともに英語)に参加しました。また、その他に留学生の友人と一緒に留学生コースの3年生の授業にも参加しました。



戴教授と



解剖学講座の若手の先生方と



なんと自分専用のオフィスを与えられました

- ・ 系統解剖学(1年生)

武漢大学医学部の解剖学教室では、2年次の解剖学実習の前にあらかじめ骨や筋肉について系統的に学習します。1つの内容につき、講義を2時間、そして次の日に実習を2時間ほど行います。講義の内容は上肢、下肢、体幹などに細かく分類されていて、それぞれの構造がどのように作用するか

などについて詳しく説明されていました。その後の実習では解剖室で学生が何人かのグループに分かれ、骨や筋肉のみを残して綺麗に解剖されてある関節などを観察します。福島医大では骨学は別の科目としてありますが、筋肉については解剖学実習で同時に学びます。しかし、筋肉や血管、神経を綺麗に解剖することは、解剖に慣れていない学生にとっては難しく、結局うまく解剖できずにその項目を終えてしまうことがよくあります。なので、このように解剖学実習とは別に、先生が上手に剖出した構造を確認しながら学習できるというカリキュラムはとても魅力的に感じました。



系統解剖学の講義の様子

- 解剖学実習(2年生)

武漢大学での解剖実習は5~8人ほどのグループで1つのご遺体を解剖していきます。特に一人一人別の作業が割り当てられるということはなく、みんなで協力して作業していくというものでした。白衣を着たまま実習を行うので、たまに白衣が汚れます。僕はイラク、イエメン、バングラディッシュから来た留学生のグループに混ぜてもらい解剖を行いました。筋肉の構造や名前、解剖の操作について英語で会話するのは大変でしたが、臨床科目を学び終えてからの解剖実習だったためとても勉強になりました。



解剖学実習室(撮影許可済み)

- ・ 留学生コース3年生の授業

留学生の友達と一緒に、外科総論、放射線科、診断学、臨床医学中国語の授業に参加しました。たまに授業中教室を抜け出したり、遅れてきたりする学生もいましたが、授業中、学生がためらわずに先生に質問をし、先生の問いかけに対し多くの学生が反応するなど、授業に対して学生が主体的で、日本の学生との授業態度の差を感じました。



外科総論(Surgery of burn)の授業

<大学生活について>

- ・ 寮(Dormitory)

僕たちは大学構内にある留学生向けの宿舎、迎賓楼(インビンロウ)に滞在しました。さすが大学の中にあるだけあって、講座から徒歩1分の好アクセスでした。かつては来賓向けのホテルとして使われていたらしいのですが、あまり綺麗ではありません。エアコン、冷蔵庫、ケトル、テレビ、洗濯機(全ての部屋にはない)がありましたが、エアコンは効きが悪いです。冷蔵庫、ケトルはあまり清潔ではなかったので使いませんでした。テレビはつきません。洗濯機は途中で修理してもらいましたがはじめの1週間ほどは使えませんでした。でも、しばらく生活していくうちにそのような環境にも慣れ、後半はとても居心地がよく感じました。



迎賓楼(赤い文字が書いてある建物)の前の通り。手前
にある建物が学生第一食堂

- 食堂(Canteen)

武漢大学医学部には2つの学生食堂があります。どちらもとても安く経済的です。ご飯(大)が0.6元(約10円)、おかずが3~6元ほどなのでほとんど10元(約180円)以内ですみます。ただ、ほとんどの料理が油っぽいです。また、お昼時になるとたくさんの学生が押し寄せ混雑します。ちなみに武漢大学の学生はこの学食が好きではないらしく、週末は外のお店に食べに行くそうです。特に留学生はもっと学食が嫌いで、中には学食に全く行かないという友達もいました。

- 売店(supermarket)

寮からすぐの場所に、4つほどの売店が並んでいます。お菓子、果物から日用品まで取り扱っていて、生活に必要なものは基本的にここで手に入ります。中国では水道水が飲めないため、2リットルペットボトルの飲用水(3元くらい)を何度も買いに行きました。

- 通信環境

Wi-Fiはアパートと講座にあります。また、中国ではLINE、Twitter、Facebook等のSNS、さらにGoogleや多くのメール(ただしoutlook、yahoo-mailは使えた。)は基本的に使えません。代わりにWechatというLINEのようなアプリがあり、基本的にはそのWechatで連絡を取っていま

した。LINE や Facebook は、VPN という海外のサーバーを経由するサービスを利用することで使えるようになりますが、不安定なことが多いです。

<日常生活について>

- ・ 言語

中国では英語はほとんど使えません(学生食堂や大学の売店も含む)。そのため、お店では簡単な中国語のフレーズを覚えたり、商品の指をさしたりして、なんとか注文していました。

- ・ 交通

とにかく公共交通機関の運賃が安いです。武漢市内では、バスは一律 2 元(約 40 円)、地下鉄 3~4 元(約 60 円)、タクシーも高くて 20 元(約 400 円)程度。さらに高速鉄道(日本でいう新幹線)も西安→武漢(5 時間)でたったの 400 元(約 7,500 円)ほどしかしません。

そして、車の交通量が多く、マナーが悪いです。一日中クラクションの音が絶えませんし、かなり強引に車が割り込んできます。車と車の間の距離が驚くほど狭く、バスやタクシーに乗っているとヒヤヒヤします。武漢のバスの運転手は相当な運転技術を必要とするらしいです。

- ・ 食事

基本的には学生食堂で食べましたが、先生や友人と、大学の外のお店にもたくさん行きました。大学から歩いて 20 分ほどの漢街(Han-Street)には美味しいレストランがたくさんありますが、少し値段が高いです。またスターバックス、KFC、マクドナルドなどもあります。日本食のレストランも少しありました。また、大学の裏には留学生行きつけの安くて美味しい麵屋さんなどもあります。



大学の裏の麵屋さん。とても辛いのがクセになる味



北京ダック



初日に先生方と行った中華料理店にて



ウイグル料理

- お酒

中国では白酒(バイジュ)というのがよく飲まれます(ただし最近の若者はそれほど飲まないらしい)。ちょっと甘め(フルーツのような香り)の蒸留酒で、その度数は40~60%とかなり高めです。むしろ紹興酒を飲む機会は1度もありませんでした。中国でも、お酒をたくさん飲める人は尊敬されるらく、酒豪のことを海量(ハイリャン)と呼ぶそうです。また、ビールがとても安いです。青島、雪花というビールがメジャーで、500ml 缶で5元(約90円)程度です。しかも嬉しいことに大学の売店でも買えます。



雪花ビール、3元(約60円)。売店で買ったソーセージとともに



超有名な白酒、茅台(Moutai)。

病理学の陳(Chen)先生が買ってきてくださった。
1,000元(約18,000円)するらしい

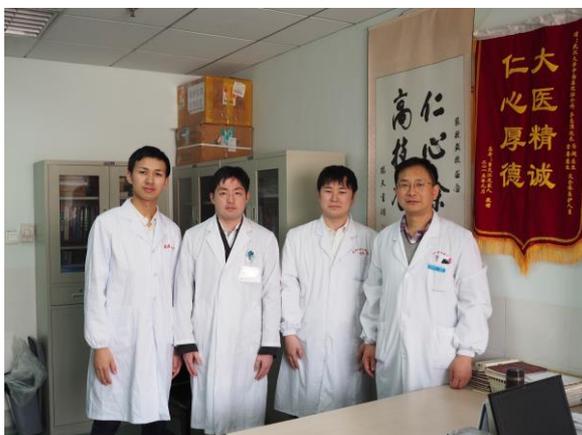
<病院見学(武漢大学医学部中南医院)>

今回、留学初日に福島医大から一緒に来られた先生とともに武漢大学医学部の付属病院である中南医院の病院見学をし、後日それとは別に脳神経外科の見学もさせて頂く機会がありました。初日の病院見学では、神経内科病棟や、新生児科のNICUなどを見学しました。清潔操作の面で、日本よりも大雑把なこと

が多く、少し戸惑いました。

脳神経外科では、朝のカンファレンス、回診、脳腫瘍の摘出手術を見学しました。印象的だったのは、回診で病室を回った時、患者さんのベッドの間に仕切りがないことと、病室の外の廊下にもベッドがあること、患者さんのレントゲン写真が患者さんのベッドの下にあり、回診の時に医師がベッドの下から取り出して画像を読み、またベッドの下に戻すということでした。

中国での医師の業務は過酷ながら収入も少なく、また、たとえ一生懸命治療したとしても、いい結果にならないと、患者さんに暴力を振るわれることもあり、あまり待遇が良くないそうです。



福島医大に留学された経験のある脳神経外科の張(Zhang)先生と



脳外科の手術の見学後



武漢大学中南医院

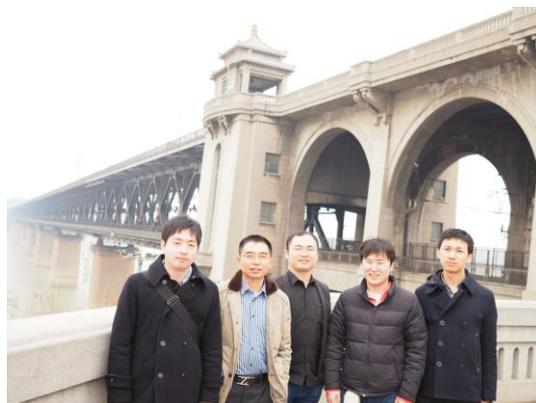
<先生との交流>

この留学期間中、福島医大に留学した経験のあるたくさんの先生に、夕食や観

光に連れて行ってもらいました。その中で、先生が福島医大に留学していた際に訪れた場所や、福島での思い出についてたくさん話してくださり、大いに会話が盛り上がりました。



昨年福島医大に留学された陳(Chen)先生(右端)、胡(Hu)先生(左端)と。陳先生には3回も夕食に連れて行っていただきました



福島医大に留学された経験のある Feng 先生(左から2番目)と。長江大橋にて

<学生との交流>

・中国人医学生との交流

中国の学生とは、過去の先輩方や講座の先生から紹介してもらい、たくさんの人と交流することができました。中国人の友人は、とにかく客人に対してのもてなしが厚いです。中国の学生はほとんどが学内の寮に住んでいて、3~12人ほどでルームシェアをしているらしいです。

また、英語の他にも、フランス語や日本語などを自主的に学んでいる人も多く、日本よりも語学に対する関心が高いという印象を受けました。



ホームパーティーを開いてくれた1年生たちと。僕たち3人以外全員ルームメイト



日本語を話せる諸星(右端)と彼の後輩と。諸星は今年の秋から日本に留学予定

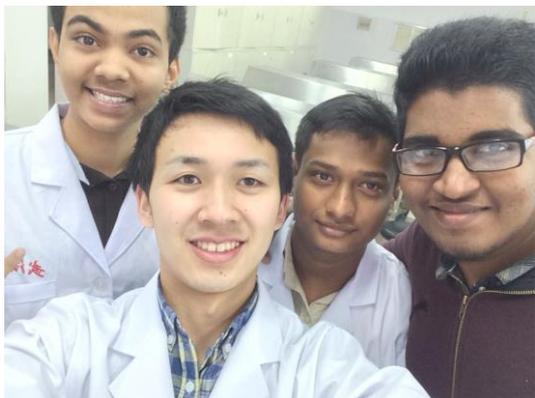


同じ4年生の Yao(左)、Xu(中)と。Yao はフランス語が得意で、この秋フランスに短期留学するらしい

- 各国からの留学生との交流

留学生の過半数がインド人で、その他タイ、スコットランド、インドネシア、マレーシア、シンガポール、バングラディッシュ、イラク、イエメンなど、たくさんの国からきていました。留学生とは、一緒に解剖実習をしたり、講義に出たり、昼食、夕食に行ったりしました。各国から集まっているだけに色々なタイプの人でしたが、明るくフレンドリーな人が多く、気軽に僕たち

に声をかけてくれました。多くの留学生は英語圏以外の国から来ていて、彼らにとって外国語である英語で医学を学び、さらに臨床実習のために臨床医学中国語も学んでいる姿はとても印象的でした。



実習に混ぜてくれたインド人の1年生たちと



過去の先輩方とも交流のある Mint(タイ出身)(右)、Stephanie(スコットランド出身)(左)と

<観光>

武漢市内

○ 黄鶴楼

武漢市の代表的な観光地で、中国の有名な詩人、李白の「黄鶴楼にて猛浩然の広陵に之くを送る」という漢詩で詠まれたことで有名です。週末に行ったこともあり、建物の中はたくさんの人で混雑していました。



○ 戸部巷

長江の近くにあるとても賑やかな屋台街です。串焼きや臭豆腐など様々なものが食べれます。やはりたくさんの人で混雑していました。



武漢市外

○ 赤壁(Chibi, レッドクリフ)

武漢駅から高速鉄道(新幹線のようなもの)で40分、さらにバスに乗り換えて40分ほどの場所にあります。三国志最大の戦い「赤壁の戦い」が繰り広げられた場所として有名です。長江のほとりにあり「三国赤壁古戦場」という三国志の巨大なテーマパークのようになっていました。



いわゆる「赤壁」。場内の一番奥にある



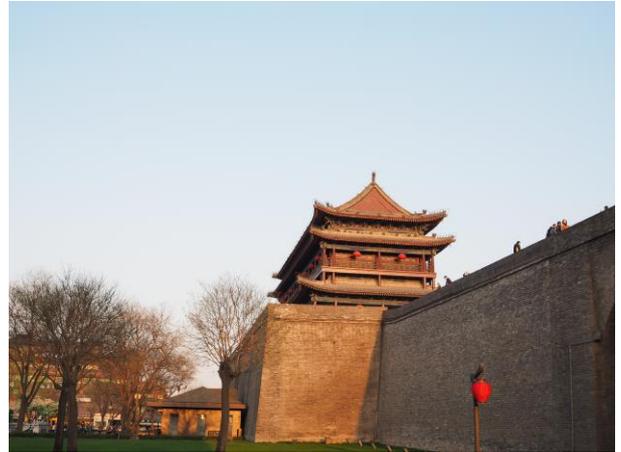
いろいろお世話してくれた1年生の Zhou と

○ 西安(Xi'an)

最後の週末に、日本語が堪能な中国人の友達とともに中国の古都、西安に観光に行きました。武漢から西安までは高速鉄道で5時間ほどですが、せっかくだからということで、行きは寝台列車(二等車)で行きました。夜の9時頃に出発して翌日のお昼頃に到着の予定でしたが、列車の到着が5時間遅れ、さらに運行自体も遅れ、西安に到着するまでに丸一日かかりました。西安では兵馬俑や、長安の城壁、大雁塔などの有名な観光地に行き、最後の思い出を作ることができました。



兵馬俑にて。一緒に行ってくれた諸星と



長安の古い城壁



寝台列車にて。



城壁の上をレンタサイクルで1周。1時間くらいかかる

<中国に行く際に不安を感じていた諸事情についての印象>

① 大気汚染問題(PM2.5)

空気が綺麗な日から、霞んで遠くの方があまり見えない日まで日によって違います。空気が汚い日のイメージとしては、黄砂がひどい日といったところでしょうか。特に外に出られないということはありませんでしたが、一日中マスクをせずに外を歩き回っていると喉に違和感を感じました。

② 反日感情

一部ご年配の方で、日本をあまり良く思っていない人もいますが、ほとんどの人(特に若い世代)は日本に対してポジティブな感情を持っていました。

③ 衛生面

少なくとも日本ほど清潔ではありません。正直言って汚いことが多いです。武漢に来てはじめての頃は日本との違いに戸惑いましたが、生活していくにつれて、案外こんなもんかと受け入れられるようになりました。

<雑感。この 38 日間を通して感じたこと>

① 海外留学に対する意識の違い

中国の先生や医学生と話していると、中国の医療はまだまだ発展途上であるという認識が強いように思いました。だからこそ、研究論文を英語でどんどん世界に発信していく必要があり、また、より高度な技術を得るために日本やアメリカ、フランスなどの医療先進国に留学したいという学生もたくさんいました。日本の医療はかなり発展していて素晴らしい一方、海外に出ずとも国内の中だけでも、ある程度高度な医療ができてしまいます。その分、海外に出て世界の最先端の医療を学ぼうとする意識、そのために英語などの語学を学ぶ意識が中国に比べ圧倒的に低いのではないかと感じました。

② 主体性の違い

中国での生活を通して、日本人の「人様に迷惑をかけない」「和の心」「奥ゆかしさ」などの集団での調和を重視する民族性は美しく、素晴らしいと思う反面、「空気を読む」や「出る杭は打たれる」に代表されるように、人と

違うことをすることを嫌い、「普通」であることを良しとする雰囲気があるように思います。しかし、14億人の人口を有する中国において「無難に、普通に」というような考えは通用しません。人口が多い分、たとえ自分がいなくなったところでその代わりはいくらでもいるため、主体性を持ち、強く生きていかなければ生き残れないのだなと感じました。

③ 中国と日本は文化的に近い

この留学を通して、メディアで報道されている社会主義の中国とは違った、中国の「人々」に触れることができました。そこで思ったのは、中国と日本は文化的に本当に近い国であるということです。実際、日本文化の多くは論語や、漢詩、中国仏教などから大きな影響を受けていて、社会体制や大まかな国民性は日本と違えど、その文化の根底にあるものはやはり同じなのだと思いました。

<最後に>

正直、今後医師として生きていく上で、医療先進国に最先端の技術を学ぶために留学する機会はあるかもしれませんが、中国のように、医療の分野でまだまだ発展途上にあるものの、めまぐるしい勢いで成長している国の姿、そしてそのエネルギーを自分自身の目で、耳で感じる機会というのはなかなか無いと思います。今回、福島医大と武漢大学医学部の皆さんの手厚いサポートにより、本当に充実した留学生活を送ることができました。最後に、この留学にあたりサポートしてくださった、関根先生、永福先生、國分さんをはじめ企画財務課の皆さん、Paul Martin 先生、武漢大学医学部の先生方、友人たちに心から感謝申し上げます。